

68. 閻魔堂横丁とは何処か

問 昭和60年9月のK紙に連載されている「横丁」第10回の「閻魔堂横丁⁽¹⁾」が「土樋新丁」のことであるように書かれ、略図にもそのように示してあります。そのような町名であるとは聞いたこともありません、果してその通りなのでしょう。

答 その記事と略図に示されている「土樋」の延長、石垣町⁽²⁾→石名坂⁽³⁾→穀町⁽⁴⁾の直線道路は、正しくは「土樋新丁」でなければなりません。この道路は、明治39年新設したもので、「仙台市史」（明治41年版）に次の記事があります。

『市制実施以来新開道路の重なるものを掲ぐれば

卅九年 土樋新丁[○] 自土樋[○]至穀町[○]延長八十間 幅三間 土樋ヨリ国道ヘノ捷路……明治三十九年に至りて仙台市参事会は新道を各所に開き翌年其名称を定めり左の如し

〔略〕

一土樋ヨリ穀町ニ達スル新開道路ヲ土樋新丁ト称ス

〔略〕

仙台市南方の士民年来渴望の要路たる土樋新丁の開鑿成るや、有志者相謀りて盛に其開通式を行ふ、早川仙台市長之が命名の辞を述べて曰く

明治三十八年三陸悉く稔らず細民飢饉に苦しむ仙台市即ち土木開墾等生業を授けて以て其窮を賑〔にぎ〕はさんとするや仙南有志相図りて要路の開鑿を請ひ敷地を寄附し家屋を移して土木の作業を容易ならしめ遂に土樋東端より穀町中央に達すへき直線路を開鑿して本日開通の式を挙ぐるに際し命名を当職に請ふ依て思惟〔おもえ〕らく必らず佳名あるへしと然りと雖も公衆共用の道路の如きは宜しく俚耳〔りじ〕に慣れ市民に熟したるに如かず依て命して土樋新丁と名つく若し夫れ土地戸籍の称呼に至りては既に法に於て定まるあり市民当に之に従ふへし敢て一言を附して新道命名の辞とす』

閻魔堂〔えんまどう〕横丁は、この土樋新丁とは全く別な細道で、その一筋北の、しかも石垣町一石名坂間の孫兵衛堀南岸に沿って、やや弓なり状に通じていたもので、土樋新丁の開通とともに廃道になってしまいました。清水小路⁽⁶⁾の大量の湧水を導いて七郷方面の農業用とするための孫兵衛堀⁽⁷⁾が、荒町・土樋の段差線に掘られていました。その孫兵衛堀の保守管理の必要上、その南岸沿いに設けられた作業路が、同時に石垣町一石名坂間の捷径として利用されてきたもので、この細道が石名坂に突当

る手前南角に閻魔堂があったので、閻魔堂横丁と呼ばれるようになったのであります。閻魔堂横丁は、「寛文9年〔1669〕仙台北城下絵図」には孫兵衛堀に沿いゆるい弧状の細道として現われており、「元禄4、5年〔1691-92〕仙台北城下絵図」更には「安政3-6年〔1691-92〕安政補正改革仙府絵図」には、他の路線並の太さで図示してあります。「明治13年宮城県仙台区全図」（宮城県）には「閻魔堂横丁」が町名入りで記されており、「明治22年仙台市明細図（三輪秀春編）」・「明治26年仙台市実測全図（仙台市）」・「明治38年最近実測仙台市街全図（額田金五郎編）」等に「閻魔堂横丁」の所在が確認されます。また、町名としての「閻魔堂横丁」もあったことが、「宮城県各村字調書」（宮城県）によって知ることができます。

廃道後の閻魔堂横丁は、孫兵衛堀が今は暗渠となり、人家が建込んでしまい、旧状は全く失われてしまいました。そのためか、無責任な市販地図⁽⁸⁾が、土樋新丁を元閻魔堂横丁などと記入して誤まりを伝えているのです。

注(1)：「仙台地名考」（菊地勝之助）に次のように書かれている。

『石名坂から石垣町に通ずる横丁を俗に閻魔堂横丁といった。石名坂の南東に仰信寺の閻魔堂があったので斯く呼んだのである。仰信寺が明治三十九年廃寺となった時、この閻魔堂は新寺小路の善導寺に移された。閻魔像その他、こわれたまま今も保存されている。』

「閻魔堂横丁」（横田義雄。「日曜随筆」第61号の内）は、次のように記している。

『私は石垣町二番地に住んでいるが庭は南に面し大年寺山が見える。南保健所の屋根や円福寺の森も左方に見える。ここが町中の割に眺望が利くのは荒町と土樋の間に段丘があり、南へ緩傾斜をなして広瀬川の河原に下る地勢だからである。現に私の家の南側は一問程の高さの石垣になっている。藩政時代に石垣衆（足軽）が住んでいたので石垣町と呼ばれるということだが……。私の妻は石垣町で生れたのだから、この辺の地理に明るい見え、こんなことを言い出した。』

南側の土地は昔は野原で、じめじめして池があった。暗い杉森があってエンマ堂横丁という淋しい通りであった、という。

私は仙台に、かれこれ四十年〔この時昭和36年〕は住んでいるが、エンマ堂横丁などという町名を聞くのは初耳である。そこで仙台市史七、別篇五、仙台の寺院と仏堂の章を開いてみると、

『閻魔堂、明治の中期まで石名坂から石垣町に通ずる細横丁があり、俗に閻魔堂横丁と称せられ、石名坂との南角に閻魔堂があった。堂は二間四方で、閻魔王と奪衣婆と十王の木像が堂内に安置してあったが、堂は明治三十五、六年頃に取り毀されて横丁も亦廃道となった。』と記してあり、この閻魔堂は石名坂の仰信院という浄土宗のお寺の附属のお堂であった。仰信院も荒廃して明治三十九年廃寺として寺籍を削除されたという。仙台地名考にも略同様の記載がある。

そこで宮城県立図書館に行って、……阿刀田令造編仙台城下絵図の研究の附図（斎藤報恩会伝物館図書部研究報告、昭和十一年八月）について、寛文、正保、元禄、安永、天明、文化、文政、安政の城下絵図を閲覧してみると、いずれの古図にも閻魔堂横丁という町名は記していない。然し、次のような事が判った。

(1) 寛文（一六六一年）の絵図には、清水小路から岐れた孫兵衛堀が、現在の荒町小学校敷地を横切り、一旦南下し再び北上して昌伝庵と仏眼寺を通り、石垣町に出て（現在の石垣町、土樋角の明活堂菓子屋の北境を通る）つき当りより二、三間南で石名坂に出て、更に東北に進み大安寺境内から東方に走っている。この孫兵衛堀は段丘の緩斜面にに沿い西より東へ、ゆるい弓形をなして、石垣町から石名坂へ抜けている。絵図には、この孫兵衛堀に沿い細径が記入されている。

安政（一八五四）の絵図には割に太い道として記入されている。

(2) 寛文の絵図を見ると、土樋は石垣町に突き当りで終り、現在のように、石名坂へ通ずる道は無かった。当時は石垣町から石名坂へ行くには、荒町を廻るか、堰場（どうば）を廻るの二途しか無かった。従って、孫兵衛堀沿いに歩くのが、近道として用いられたものと、私は想像する。

そこで、石垣町古老の藤田三郎氏（明治二十二年生、七十二才、石垣町と土樋の南西角で煙草屋を営んでおられる）を訪ねて昔の話を聞いてみた。それによると、

「明治の頃は、土樋が石垣町につき当る所には粉屋の千葉幸太郎氏の家、通称粉平さんの家があるだけで、そのうしろは石名坂まで家が無かった。北から南へとゆるい傾斜地で石名坂に近い方は、円福寺の境内に入り、北よりには昼尚暗い杉林があり、淋しい所だった。巡査が暗くて困るから下枝を払ってくれと円福寺さんに言ったという。その南は桑畑であった。石垣町に近い方も梅林と畠と野原で子供らのタコ揚げやコマ廻しの遊び場になっていた。孫兵衛堀は幅一二尺にすぎない溝で、石名坂の近くには周囲五、六間の沼があった。円福寺には、藩政時代塩釜明神を祀ったが（これは維新以後は地蔵菩薩を本尊とする地蔵堂となる）そのお釜さんが、飛んで沼となったと伝えられ、飛釜沼とよぶそうである。

石名坂の現在、石名の墓（今は円福寺門内に移されている）のあるところ（刷毛屋、但木政治郎さんの北境）を、孫兵衛堀とエンマ堂横丁が通っていた。エンマ堂横丁は孫兵衛堀に沿う道で、幅一間たらずはあったと思う。閻魔堂は屋根もあり、そのまわりにはお墓もあった。然し、寺の建物は見たことがない。

土樋が石名坂に抜ける現在の道路（土樋新丁）は明治四十年富田春之進さんが尽力して出来たので、そこから人骨や亜炭などが掘り出されたという。大正に入ると人家が建ち、杉林も伐られ沼もなくなり、現在は、昔の閻魔堂横丁の路上にも、隙間無く家が立ち並んでいる。閻魔堂横丁の石垣町の入口は、石垣町一番地の所で、今の飯沼勇康氏宅の南境である。」

私の妻は大正二年生れで、次のように言っている。

「大正の初め、三四才の頃は、石垣町二番地の生家から南へ、庭から、だらだら下りの野原になつていて、毎日遊びに行った。石垣町沿いに、クコとタマツバキの生垣があった。春はタンポポ、スマレ、ツクシが咲き、梅も咲き気持よかった。カラタチ、茶、肉桂、ビワの木もあり、じめじめした湿地もまじっていて、春はタゼリを摘んで遊んだ。東の方へ行くと杉林と池があって、お堂もあった。池は四五坪のものと思うが、池を蔽う杉林はさびしくて通れない位で、石名坂の近くにあったお堂は一間半位の高さで格子の戸、鰐口などもあった。その辺の傾斜地に墓石もあり、彼岸の頃は削り花が飾られ美しかった。ミミズクもよく見かけ、早朝に家の庭の梅の木に止まっている事もあった。夏の宵はコウモリが沢山飛んだ。野原で遊び廻った記憶だけで、エンマ堂横丁という道の記憶はない。それ迄父の土地であったのが、大正七、八年の経済恐慌時代に手放してしまったためである。」

以上の話からエンマ堂横丁は、孫兵衛堀に沿う私有地を通る近道で、明治末年に、石垣町、石名坂間の土樋(土樋新丁)が開通すると共に廃絶した。

閻魔堂は大正の初め迄あった。(仙台市史も仙台地名考も明治三十年代に堂が無くなったと記しているが、それは間違いである。又、仙台地名考には、今も坂下の西側に石名の墓と伝えられるものがある、と記しているが、これは石名坂の北部で、坂上とした方がよい。私は坂下とあるので堰場の方へ墓を探しに行つて空しく帰つたのであった。〔石名の墓はその後円福寺の門内に移された。〕)

大正年代に入ると共に人家が建ち、現在はエンマ堂横丁の名を知る人も稀になつてしまつた。」また、「仙台郷土研寄」第9号第12号の内の「仙台の古い姿」と題する報告記事に、次のように書かれている。

『奪衣婆しやくわばの木像は、もと石名坂の閻魔堂に在りしもの、明治中頃まで石名坂と石垣町を結ぶ横丁があって俗にエンマド横丁と称したのは此の閻魔堂が在つたからで、堂は善導寺の末寺だったと云ふ仰誉院といふ小さな寺があつてこの堂を管理していたらしい。堂は所謂十王堂で中に閻魔と奪衣婆、その他十王の木像が安置されていた。特に奪衣婆は恐ろしい形相で、今なほ多くの人々に記憶せられてゐる。堂は明治三五年頃取り毀され奪衣婆の像等は善導寺に撤収されて姿を没してゐたもので今回五十年振りに開帳する事となつた。閻魔像は紛失して見えぬ奪衣婆のみがひどく壊れたまゝ残つてゐる。』

注(2) 荒町毘沙門堂前から南へ土樋に下る通りをいう。城下第1次拡張(寛永5年〔1628〕)後、ここに作事方の石垣衆を置いたところである。元禄頃からは、御作事方御足輕屋敷となつてゐるのは、天和3年〔1683〕石垣足輕改めて作事方足輕と称せられることによる。

注(3) 土樋下の堰場から北へ円福寺前を通つて上弓の町・荒町へ上る坂道をいう。荒町・土樋の段差線を東へ流れる孫兵衛堀に遊女石名の墓石を渡して橋としたことから、石名坂の名が出た

という。この墓がいつの頃からか土中に埋没したが、明治末頃掘り出して坂上の孫兵衛堀の南側に建てられたが、今は円福寺の寺門内に移された。碑面には承応2年〔1654〕の年号が刻まれている。石名はこの地の出身で、江戸吉原の名妓として全盛を極めたという。その死後、明暦年間〔1655-57〕吉原の遊女・楼主・茶屋などが、石名追善のため送ってきたという大般若経600巻が、今も円福寺に保存されている。円福寺には、また、悪玉観音があり、仙台三十三観音の第20番札所となっている。

注(4) 仙台北城下4穀町(立町・二日町・新伝馬町・穀町)の一。米穀類の売買特権を与えられていた。この町が取り立てられたのは、城下第1次拡張(寛永5年〔1628〕)以降である。

注(5) P.96の注(6)及びP.388の「139. 早川智寛の生年はいつか」参照。

注(6) P.29の「15. 仙台の七坂八小路」参照。

注(7) P.29の「15. 仙台の七坂八小路」参照。

注(8) 「仙台市全図」(佐藤茂吉編。大正6年刊)が『土樋新丁(元エンマ堂横丁)』と町名を入れている。これにならったらしい「仙台市全図」(陰田勇編。大正15年刊)も、同じ誤りを記している。

資料 仙台市史(仙台市。明治41年版)

寛文9年仙台北城下絵図

元禄4、5年仙台北城下絵図

安政3-6年安政補正改革仙府絵図

明治13年宮城県仙台区全図(宮城県)

明治22年仙台市明細図(三輪秀春編)

明治26年仙台市実測全図(仙台市)

明治38年最近実測仙台市街全図(額田金五郎編)

仙台地名考(菊地勝之助)

閻魔堂横丁(横田義雄。「日曜随筆」第61号の内)

仙台郷土研究第9巻第12号(仙台郷土研究会)

69. 「押足軽」とは、またその読みはどうか

問 「押足軽」とは、どのような足軽のことですか。また、その正しい読み方も知りたいのです。

答 「押足軽」とは、戦陣や行列の最後尾に付いて、後方の防備や、不時の事態に即応する役割を荷う足軽のことです。足軽は、本来最前線や前方に位置させるものですが、場合により、必要に応じて、このようにしんがりを勤めさせるとき、このような呼び方をしたのです。